

連載

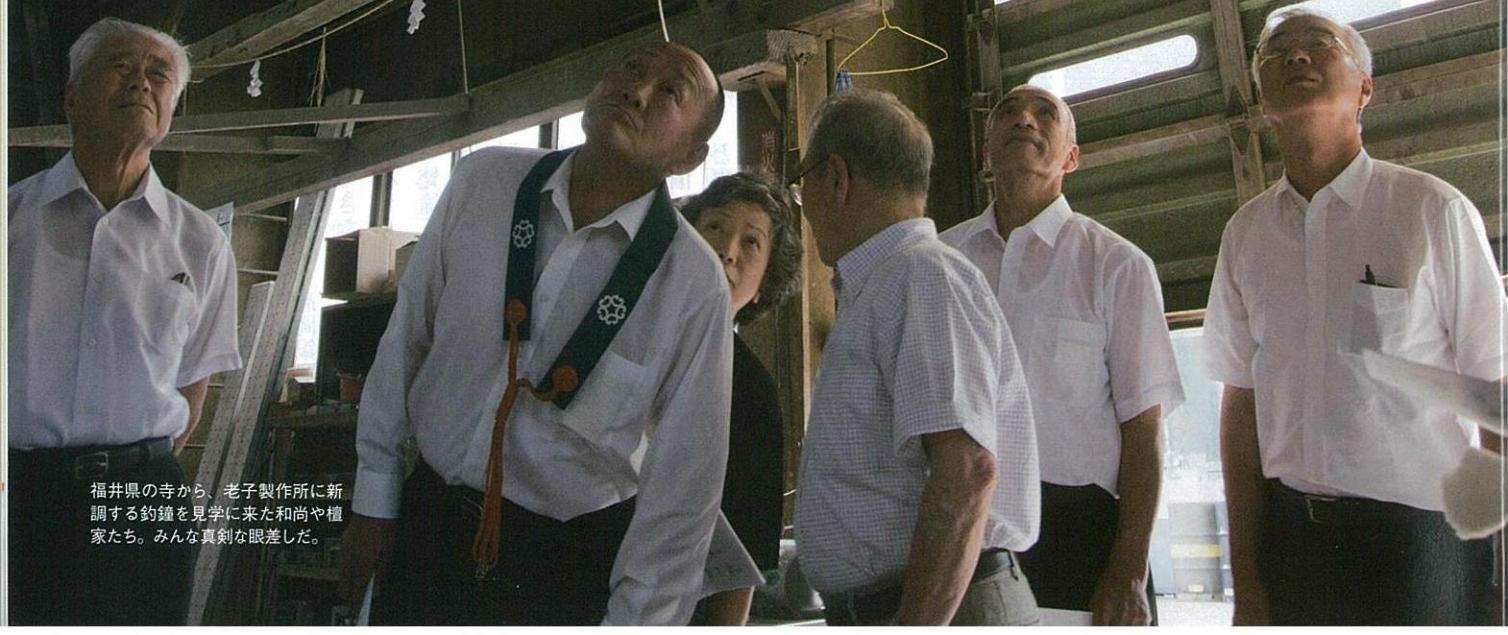
手業 手技

写真・文 大西暢夫 7

梵鐘の音を支える 職人たち

老子製作所(富山県高岡市)

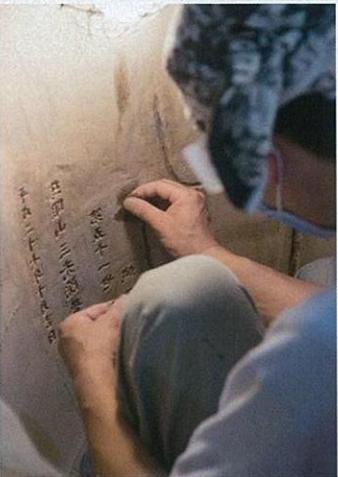
銅器の製作で知られる富山県高岡市。
高岡銅器の歴史は1609年にまで遡る。
江戸中期に創業した老子製作所もその一つで、
これまでに納入した寺社の鐘は2万を超える。



福井県の寺から、老子製作所に新調する釣鐘を見学に来た和尚や檀家たち。みんな真剣な眼差しだ。

釣鐘の外側になる部分。ぼつぼつと隆起している部分を螺鈿（らほつ）という。厚さのない部分で強度を増すとも神聖なところとも言われている。

【右】老子製作所の敷地には釣鐘や仏具が並んでいる。
【右下】老子製作所では研磨から溶接、彫金、着色まで一貫で仏像などを製作している。
【左】釣鐘の内部に入り、「文字」と繊細に作業を進める。
【左】「親鸞上人」の製作過程。「湯」が漏れ出さないように慎重に作業する。



高岡市の郊外に、高岡銅器を製造する企業が集まつた「高岡銅器団地」がある。そこには約400年続く高岡銅器を受け継いできた企業30社が立ち並んでいる。

梵鐘（釣鐘）や寺院の仏像

仏具などを製作する老子製作所もその中の一つだ。工場の敷地に入ると、釣鐘や仏像が迎えてくれる。

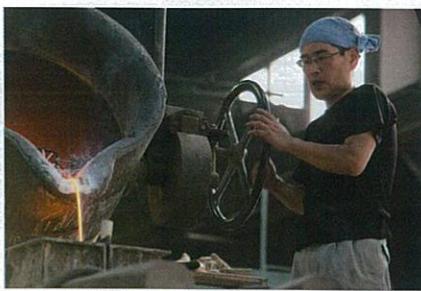
「戦後70年になるが、まだ戦後復旧の仕事を続けていますね」と専務の元井秀治さんが話してくれた。

「太平洋戦争が始まり、日本の釣鐘は国に供出したり、没収されていったんですよ。そうした寺院に鐘を納めると『70年ぶりに釣鐘が帰ってきました』と喜んでくださいます」

老子製作所も戦時中、海軍舞鶴工廠の監督工場（戦艦の部品を造る専用工場）に指定され、一切梵鐘が製作できなかつた。終戦後はその反動で、梵鐘需要が急増。当時は、現在の約30倍もの仕事量だつた。

老子製作所は資料が焼失したため、はつきりとした歴史はわ

寺院に鐘を納めると
「70年ぶりに釣鐘が帰つてきました」と
喜んでくださいます。



「右上」森田雄一さんが、真剣な眼差しで「湯」を流し込む。 「右中」炉で銅は1,085℃、錫は231・9℃、亜鉛は419・5℃で溶かす。 「右下」1,200℃になった「湯」を流す。 「左」3人の共同作業。 いよいよ2尺5寸の釣鐘の鋳型に「湯」を流し入れる。



「湯」の流し込みの作業の前、職人たちのお経を唱える。

現在、製作しているのは2尺5寸の梵鐘。福井県坂井市三国町の寺からの注文だ。森田雄二さん（46）と楠正樹さん（43）、渋谷充輝さん（27）の3人がチームを組んで手際よく作業を進めている。「単純な作り方だからこそ、その慣れがおつかないんですよ。何が起こるかわからないですから」と楠さん。

1,200℃の「湯」との格闘。
「湯」の流し込みはわずか5分間。工場内に緊張が走った。

からないが、創業は江戸中期だ
という。

これまでに納入した鐘は大小
合わせて2万を超える。納入先
には名刹・古刹が並び、広島市

の「平和の鐘」も製作。岩手県
釜石市など東日本大震災で大き
な被害を受けた6市にも鎮魂の
鐘を収めた。

人の心を穏やかにして、一つ

にする梵鐘。日本の梵鐘の音は、
余韻と唸りが特徴だ。音の決定
要素は、形、肉厚のバランス、
配合、温度などで、それを支え
るのが職人たち。銅と錫と亜鉛

をガス熔解炉で溶かして1,20
℃の「湯」を沸かし、鋳型に
流し込む。

現存する国内最古の梵鐘は京
都・妙心寺にあり698年前後
(推定)に鋳造されたものだと
いう。梵鐘は1,300年の歴史
の中で、基本的な作り方は変わ
っていない。変わりようがない
ほどに淘汰されてきた。

しかし、いま大きな問題に直

面している。それは梵鐘をつく
じゅくろく。2尺2寸ほどの梵鐘な
らば、太いシユロが柔らかな音
を響かせる。だが、そのシユロ
が手に入りにくくなり、現在は
米国産の松を使用しているのだ。

現在、製作しているのは2尺
5寸の梵鐘。福井県坂井市三国
町の寺からの注文だ。森田雄二
さん（46）と楠正樹さん（43）、
渋谷充輝さん（27）の3人がチ
ームを組んで手際よく作業を進
める。「単純な作り方だからこ
そ、その慣れがおつかないんで
すよ。何が起こるかわからな
いですから」と楠さん。

1,200℃の「湯」との格闘。
「湯」の流し込みはわずか5分
間。工場内に緊張が走った。